



Title	餌生物転換周辺時期におけるスケトウダラ太平洋系群稚魚の分布と生残に影響を与える環境要因に関する研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	川内, 陽平
Citation	北海道大学. 博士(環境科学) 甲第11351号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55486
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yohei_Kawauchi_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

生物圏科学専攻：博士（環境科学）

氏名 川内 陽平

審査委員	主査	教授	宮下 和士
	副査	教授	仲岡 雅裕
	副査	准教授	三谷 曜子
	副査	助教	山本 潤
	副査	研究主幹	志田 修（北海道立総合研究機構水産研究 本部中央水産試験場資源管理部）

学位論文題名

餌生物転換周辺時期におけるスケトウダラ太平洋系群稚魚の分布と生残に影響を与える環境要因に関する研究

(Studies on environmental factors influencing in distribution and survival of juvenile walleye pollock, *Theragra chalcogramma*, in the Japanese Pacific stock around transition period of prey size)

我が国の漁業において重要な漁獲対象資源であるスケトウダラ太平洋系群の資源変動を左右するのは、初期生活史における各発育段階の成長や生残の積み重ねだといえる。そのため、様々な時期における生態や資源状況を把握する必要がある。本研究では、太平洋系群の主要な産卵・成育場である北海道噴火湾および湾外東部陸棚海域における浮遊稚魚期に着目した。本系群の稚魚は、5月頃に全長30mm前後を境界としてより大型の餌生物を摂食することが知られている（餌生物転換）。餌生物転換により稚魚が好適な摂餌を行えるか否かは、後の成長や生残に作用することで新規加入魚量に影響すると考えられている。しかし多年数で実施した調査研究の成果はあまり報告されてこなかったため、稚魚の分布生態の経年変動や、加入に対する餌生物転換の役割は十分に解明されていない。そこで、2005～2012年に実施した音響調査、生物標本採集、海洋環境観測の結果から、噴火湾周辺の餌生物転換期（5月）と噴火湾移出時期（6月）における太平洋系群稚魚の分布環境と摂餌生態を明らかにすることを目的とした。また、これらの多年数データを用いることにより、前後の発育段階との関係から加入量変動に対する餌生物転換の役割を議論した。

音響調査と海洋環境観測により、当該時期における稚魚の分布環境を調べた。その結果、多くの年で稚魚は成長に伴い底層方向へ水塊を変えつつ（沿岸親潮表層水（S-CO）→親潮水（OW））、湾外へと移動する傾向にあった。稚魚の密度が高い水温は5～8℃程度であり、海域内でも比較的高温な環境に分布したが、全長30mmを超える大型個体の多かった年はより低温な環境に分布が偏る傾向がみられた。また、温度環境を含む周辺物理環境は経年で変化したことから、稚魚の代謝や摂餌もそれによって変わったと考えられる。5月と6月の間の稚魚の体サイズには、全く相関がみられなかった。このことから、物理環境などの要因が餌転換周辺時期における成長を左右する可能性が示唆された。

胃内容物分析と動物プランクトン採集から、稚魚の摂餌状況と飼料環境を明らかにした。調査海域では、カイアシ類3属 (*Pseudocalanus*, *Neocalanus*, *Eucalanus*) が優占し、稚魚もそれらを多く摂食する傾向にあった。また、大型カイアシ類はOWを含む中底層で特に優占し、全ての年で稚魚は30mm前後を境界としてそれをより多く摂食した。前述におけるスケトウダラ稚魚の分布特性を踏まえると、稚魚は成長し、中底層へ移動することで、大型カイアシ類を食べていたと考えられる。一方で、餌生物量には経年で大きな変化がみられ、胃内容物に占める割合もそれに依りて変化した。また、摂餌強度はその年の稚魚の体サイズに依存する傾向があったことから、各年の飼料環境と稚魚の体サイズとの関係は稚魚の成長を左右する可能性が示唆された。

ケーススタディとして、餌生物転換期 (5月) におけるスケトウダラ稚魚の日周鉛直移動に着目し、稚魚の分布と摂餌の昼夜変化について検討した。ここでは、2011年5月の調査で収集したデータを用いた。その結果から、稚魚は昼夜で底層から表層まで大きな鉛直移動を行うことが明らかとなり、夜間においては、昼間よりも大型プランクトンを多く摂餌し、摂餌強度も高まる傾向がみられた。このような昼夜変化は、生残率や、摂餌成功率を上げるうえで非常に重要になると考えられる。一方、各場所の環境や稚魚の体サイズ組成は異なっていたことから、その場所の特徴に応じた分布戦略をとっていたと考えられる。

本研究の結果でみられた経年的な稚魚の体サイズ、物理環境、飼料環境の違いに着目し、稚魚の成長要因を検討した結果、餌生物転換期の成長には好適な水温環境と餌との適合が重要だと考えられた。また、前後の発育段階におけるスケトウダラ生物量および環境要因との比較から、餌生物転換時期の成長は、卵仔魚期の成長と合わせて、後の体サイズ依存による被食減耗を減少させ、加入量を増加させる重要な要因となると考えられた。しかしながら、卓越年級群 (2005年級群) の6月における稚魚の体サイズは他年に比べて小型な一方で、後の時期の生物量は非常に高かった。これらのことは、餌生物転換期を含む噴火湾移出前までの成長は減耗を左右する間接的要因の1つであるが、飛び抜けて加入量が多い年級群の発生には寄与せず、餌生物転換以降の時期の要因が卓越年級に影響を与えていることを示唆する。

本研究は、餌生物転換期の分布生態の経年変化を多年数のデータから明らかにし、その結果を用いて当該時期が後の発育段階へ与える影響を詳しく評価したものであり、資源量変動機構を解明するための重要な知見の1つとなることが期待される。

審査委員一同は、これらの成果を高く評価し、また研究者として誠実かつ熱心であり、大学院博士課程における研鑽や修得単位などもあわせ、申請者が博士 (環境科学) の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。